畠山直哉 はたけやま・なおや

写真家。1958年岩手県陸前高田市生まれ。筑波大学芸術専門学群にて戦後前衛芸術集団「実験工房」のメンバーであった大辻清司や山口勝弘に薫陶を受ける。1984年に同大学院芸術研究科修士課程修了。以後東京を拠点に活動を行い、自然・都市・写真のかかわり合いに主眼をおいた一連の作品を制作する。石灰石鉱山の連作と、東京の建築空間や水路を被写体にした作品群で注目を集め、1997年第22回木村伊兵衛写真賞、2001年第42回毎日芸術賞、2012年芸術選奨文部科学大臣賞などを受賞。国内外で個展、グループ展に多数参加し、2001年にはヴェニス・ビエンナーレ日本代表の一人に選出されている。また2012年には、ヴェニス・ビエンナーレ国際建築展の日本館展示に参加し、館はその年の金獅子賞を受賞した。作品はTATE（ロンドン）、MoMA（ニューヨーク）、東京国立近代美術館をはじめとする、主要都市の美術館に収蔵されている。2011年の東日本大震災以降は、故郷の風景を扱った作品の発表や、震災関連の発言を積極的に行っている。

Naoya Hatakeyama

Photographer. Born in 1958 in Rikuzentakata, Iwate Prefecture. While he was a student at the School of Art and Design at Tsukuba University, Hatakeyama was influenced strongly by Kiyoji Otsuji and Katsuhiro Yamaguchi, who were members of the post-war avant-garde art group, "Jikken Kobo (Experimental Workshop)." After he graduated from the master's program in Art and Design at the same university, he became active in his artistic practice with Tokyo as the base, producing a series of works that focused on the interactions among nature, the city, and photography. He drew much attention with his series that captured limestone mines and with his works whose subject matters were architectural spaces and canals in Tokyo. The awards he has received include the 22nd Kimura Ihei Award (1997), the 42nd Mainichi Art Award (2001), and the Art Encouragement Prizes of the Minister of Education, Science and Culture (2012). He has organized and participated in numerous solo and group exhibitions both domestically and internationally, including his participation as a member of Japan's representatives in the Venice Biennale (2001). In 2012, Hatakeyama participated in the Japan Pavilion exhibition, which won the Golden Lion for Best National Participation, in the 13th International Architecture Exhibition (Venice Biennale). His works have been collected in major museums around the world, including TATE (London), MoMA (New York), and The National Museum of Modern Art, Tokyo. Since the 2011 Tohoku Earthquake and Tsunami, he has engaged actively in presenting works that depict the landscape of his devastated hometown and in making statements related to the disaster.

Santa Fe, CDMX (2015)

畠山直哉 写真展 Naoya Hatakeyama *Cloven Landscape*

まっぷたつの風景

2016年11月3日[木祝]—2017年1月8日[日]
せんだいメディアテーク6階 ギャラリー4200

November 3, 2016—January 8, 2017
sendai mediatheque 6F Gallery 4200

開場時間 11時から20時
入場料 一般500円（大学生・専門学校生含む）、
高校生以下無料（豊齢カード、障害者手帳をお持ちの方は半額）
休館日 11月24日および12月29日から1月3日

Hours 11:00—20:00
Admission 500 yen for adults (including university and college students)
Free for high school students and younger children
Half price for those who have an Elderly Citizens Certificate or
Physical/Mental Disability Certificate
Closure On November 24 and during the New Year holidays (December 29—January 3)

まっぷたつの風景

写真家・畠山直哉は、１９８０年代から石灰石鉱山や工場、
都市のビル群や地下空間などのシリーズを発表し続けてきました。
そこには、私たちが普段は見ることのできない場所の、
壮大でときには畏怖を感じさせるような光景が写し出されています。
また、２０１１年の震災以降、
故郷の陸前高田を撮影し続ける姿勢には、
大きな変化を強いられた東北地方や
この国が共有できる課題が多く潜んでいます。

畠山は「もの」あるいは「事象」に目を凝らします。
それが人為的なものであれ自然の営為であれ、
起源を問い直すかのように静かに見つめ、作品として結晶化し、
わたしたちの社会、文明、そして生に対する
開かれた「問い」として投げかけてきました。
本展では、その問いかけにこそ着目したいと思います。

本展タイトル「まっぷたつの風景」は、
イタロ・カルヴィーノ『まっぷたつの子爵』から採られました。
畠山自身も愛するこの寓話は、
物事にすぐ白黒をつけようとしたがる私たちに、注意を促します。
たとえば、私たちは誰でも善悪や美醜など二つの面を持っているのに、
他人に対してはその一方だけしか見ようとしないところがあります。
物事を無理矢理まっぷたつに分けてしまえば、
物事は成り立たなくなってしまうのにです。
本展では、これと同じことが
「風景に対しても言える」という仮説のもとに展示を構成します。

「風景は、ただそこにあったものではなく、
人間が歌を詠んだり絵にしたり写真を撮ったりするたびに、
新しく生まれている」と畠山は主張します。
人の表現に応じて「風景」は生まれ、美しさや残酷さ、
不思議さや不条理さといったものとして、
その都度新しい姿を現すというのです。
震災以降、
変貌する故郷を撮影し続けてきた畠山の「風景」には、
過去からの大きな断絶が見て取れますが、
同時にそこに、「風景」の持つ二面性や両義性、
未来の「風景」への気配を
感じ取ることができるかもしれません。
初期から現在まで約２００点の作品群と対話の場を通じて、
畠山直哉という一人の写真家が取り組む「風景」が、
現在の私たちの社会にとって、
どのような意味を持つのかを考える機会となればと思います。

せんだいメディアテーク

Cloven Landscape

Since the 1980s, photographer Naoya Hatakeyama has presented several series, depicting limestone mines, factories, skyscrapers, and underground spaces, among others. In these works, he represents grand, sometimes even sublime, sceneries of places we cannot see in our everyday lives. In addition, his endeavor of continuously photographing his hometown, Rikuzentakata, after it was devastated by the 2011 Tohoku Earthquake and Tsunami addresses numerous challenges that can be shared with the Tohoku region and this country, which have had to face enormous changes.

Hatakeyama stares at “things” or “phenomena.” Be they artificial or natural, he quietly stares at them as if re-questioning their origins. The question is then crystalized as a work to be presented as an open question for our society, civilization, and life. In this exhibition, our intention is to focus on the very question he poses.

The title of this exhibition,“Cloven Landscape,” is adapted from Italo Calvino’s “The Cloven Viscount.” This allegory, which Hatakeyama loves, cautions us not to see things in black and white—something we are always prone to do. For instance, we tend to see only one side of other people, although all of us have two different sides that coexist, such as good–evil and beauty–ugliness. We do it despite the fact that if we forcefully cleave things, they do not work. This exhibition has been constructed under the hypothesis that the same can be said about the landscape.

Hatakeyama claims that a “landscape” is not something that has been there from the beginning, but rather something that is born anew every time a human being recites a poem, paints a picture, or takes a photograph. According to him, a “landscape” is born in response to a human expression, presenting itself with a new appearance each time, with traits such as beauty, cruelty, mystery, or absurdity. In “landscape” of Hatakeyama, who continuously has photographed his transforming hometown after the disaster, an enormous discontinuity from the past is apparent. However, at the same time, one may be able to see two-sidedness, ambivalence, and a glimpse of the future “landscape.”

Through his 200 works, covering his early career to the present, and through opportunities for dialogue with Hatakeyama, we hope that this exhibition constitutes an opportunity to think about what the “landscape” that Hatakeyama has been working on means to our contemporary society.

sendai mediatheque

陸前高田市気仙町今泉2013年5月14日

関連イベント　いずれのイベントも展覧会チケットの半券の提示でご参加いただけます（上映のみ有料）。申込不要、直接会場へ。

対談

1「言葉のリアル／イメージのリアル」

佐々木幹郎（詩人）×**畠山直哉**

11月3日［木祝］14時から16時

「表現者の表現方法が3・11以後、一日にして変わることはありえません。重要なのはそれ以前に、無意識であれ意識的であれ、本能に沿ってやられていたことが鮮明に見えてくると言うことです」（佐々木幹郎）。
東日本大震災後、被災地をめぐった詩人の佐々木と畠山が「写真行為」をテーマに語り合う。

場所：1階オープンスクエア
定員：先着160席

2「人工天国 —現在の風景に何を見るのか？—」

いがらしみきお（漫画家）×**畠山直哉**

11月23日［水祝］13時から15時

東北の川や山に囲まれて育った同世代のふたり。散歩を日課とし、定点観測のように風景を見つめるいがらしと、風や光を読み、釣り人のように風景を撮る畠山。
移り変わる現在の風景に、ふたりは何を見るのか。

場所：6階ギャラリー 4200
定員：先着60席
※要約筆記つき

3「暗夜光路 —写真は何をするのか？—」

志賀理江子（写真家）×**畠山直哉**

12月24日［土］13時から15時

3.11をそれぞれの場所で経験した写真家のふたり。
震災という暗い夜を過ごし、そこからどのような光を見つけたのか。
影と光を扱う「写真」という共通の方法で制作を続けてきた志賀と畠山が「写真は何をするのか」を問う。

場所：6階ギャラリー 4200
定員：先着60席

てつがくカフェ

てつがくカフェは、私たちが通常当たり前だと思っている事柄からいったん身を引き離し、「そもそもそれって何なのか」といった問いを投げかけ、「対話」をとおして自分自身の考えを逞しくすることの難しさや楽しさを体験していただこうとするもので、てつがくカフェ@せんだいとメディアテークが協働で開催しています。
今回は本展の関連イベントとして映画や作品を通じて対話する全3回のてつがくカフェを開きます。

1 映画『未来をなぞる 写真家・畠山直哉』から考える

11月19日［土］13時から17時15分

陸前高田出身の写真家・畠山直哉は、どのように震災と向き合ってきたのか。
震災後の2年間を総括的に追ったドキュメンタリー映画を鑑賞し、上映後に対話の場を開きます。

【上映】13時から14時30分（15分前開場）　場所：7階スタジオシアター
当日券のみ 一般500円、高校生以下無料（豊齢カード・障害者手帳をお持ちの方は半額）、申込不要、直接会場へ

【てつがくカフェ】14時45分から17時15分　場所：6階ギャラリー 4200　定員：先着60席
※上映チケットの半券提示でも参加可

2 展覧会「まっぷたつの風景」から「割り切れなさ」を問う

12月10日［土］14時から17時　場所：6階ギャラリー 4200　定員：先着60席

3 展覧会「まっぷたつの風景」から「明日」を問う

12月25日［日］14時から17時　場所：6階ギャラリー 4200　定員：先着60席

ギャラリーツアー

メディアテークの学芸スタッフと一緒に展覧会をめぐります。

11月13日［日］、12月4日［日］14時から
定員：両日とも先着15名　対象：小学生以上　集合場所：6階ギャラリー 4200受付前

主催
せんだいメディアテーク（公益財団法人 仙台市市民文化事業団）

助成
一般財団法人 地域創造
芸術文化振興基金

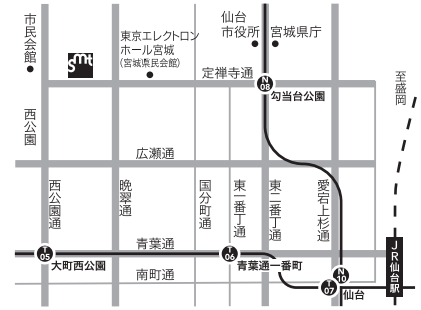
協力
東京都写真美術館
株式会社 アマナ
株式会社 資生堂
Taka Ishii Gallery

広報物デザイン 伊藤 裕
会場・什器設計 渡邉武海
インテリア 長崎由幹

後援
TBC東北放送
仙台放送
ミヤギテレビ
KHB東日本放送
河北新報社
朝日新聞仙台総局
読売新聞東北総局
毎日新聞仙台支局
産経新聞社東北総局
日本経済新聞社仙台支局
仙台リビング新聞社
S-style
エフエム仙台
FM76.2 RADIO3

お問い合わせ
せんだいメディアテーク 企画・活動支援室
〒980-0821 仙台市青葉区春日町2-1
tel: 022-713-4483　fax: 022-713-4482

アクセス
［地下鉄］南北線勾当台公園駅下車、「公園2」出口から徒歩6分（約450m）。東西線大町西公園駅下車、「東1」出口または「西1」出口から徒歩13分。東西線青葉通一番町駅下車、「北1」出口から徒歩15分。
［バス］仙台市営バス 仙台駅前-60番（仙台TRビル前、地下鉄仙台駅「中央2」出口前）のりばから「定禅寺通市役所前経由交通局大学病院」行き（系統番号がJまたはXで始まるバス）で約10分、メディアテーク前下車。**［徒歩］**仙台駅より約20分。**［タクシー］**仙台駅西口タクシー乗り場から約7分。**［自動車］**東北自動車道仙台宮城ICから約10分。
［航空機］仙台空港アクセス鉄道・仙台空港駅から仙台駅まで約25分。



この用紙はリサイクルできます